

## 1940年のバンコク日本語学校について —資料紹介（日本語学校規則書）—

北村武士、Wilailuck TANGSIRITHONGCHAI

### 1. はじめに

1938（昭和13・仏暦2481）年12月20日に、日泰文化研究所付属バンコク日本語学校が開校した。当時のタイ国における日本語教育活動の実態は徐々に解明されつつあるが、実際に行われた具体的な教育内容の詳細は不明である。当時の「日本タイ文化会館およびバンコク日本語学校規則」のパンフレットが、バンコク日本語学校の開設に関わりかつ同校での日本語教育にも携わった星田晋五<sup>(1)</sup>の関係者の手元に保存されていた。この規則書は日本国内及びタイ国内でも他には保管されておらず、開校当時の日本語学校の実態を知る唯一の残された資料として貴重なものである。以下、タイ語の規則書の日本語訳を紹介し、今後のタイ国日本語教育史研究の資料としたい。

バンコク日本語学校の日本語教育計画については長谷川（2001）に詳しいが、本稿での資料はタイ語でタイ人に具体的にどのように日本語学校の紹介を行ったかがわかり、両資料によって計画と実際の運営のそれぞれが明らかになる。

### 2. バンコク日本語学校規則パンフレットについて

バンコク日本語学校は松宮一也によって構想をまとめられ、実質的には星田晋五が中心になって立ち上げ授業を実施していた。同校は1938年12月20日に開校しすぐに日本語授業を開始したが、その後、学校の募集案内のために「日本タイ文化会館およびバンコク日本語学校規則」のパンフレットを発行したと考えられる。

この規則書は縦21.2センチ、横16.8センチで12ページ（表紙を除く）であり、表紙には題名などの他に中心に建物の全景写真がある。表紙を開いた第1ページに応接室と図書館の写真が、第2ページには教室と日本語学校の置かれている日本タイ協会の記念写真が掲載されている。この表紙の全景写真及び記念写真は北村・ウォラウト（2001）の143ページと145ページに掲載されている星田言氏所蔵の写真と同じものである。星田家に現在この写真のオリジナルが保存されているということからも、この規則パンフレット作成に星田晋五が大きく関わったと考えることができよう。

裏表紙の下部には印刷業者名と発行年（2483年）が書かれており、ページの中心部にタイの国旗と日の丸と桜を組み合わせたマークがある。このマークがバンコク日本語学校のマークなのか日本タイ文化会館のマークなのかは不明である。

### 3. バンコク日本語学校規則の翻訳

(表紙) (訳注 1)

日本タイ文化会館  
および  
バンコク日本語学校規則  
2483 年 (訳注 2)

(日本タイ文化会館全景写真)

日本タイ協会

21 ナープララーン通り トーンタープラ (ターチャーワンルアン) プラナコーン

電話番号 21544

ケーブル・アドレス "NIPPONTAI"

(p1)

写真上: 応接室

(応接室写真)

写真下: 図書館

(図書館写真)

(p2)

写真上: 教室

(教室写真)

写真下: 日本タイ協会

(日本タイ協会記念写真)

(p3)

### 日本タイ文化会館

#### 目標

日本タイ文化会館はバンコクに設立されており、日本タイ協会と交流し、タイで文化紹介を通じてより一層両国間の友好関係を促進することを目的とする。

#### 目的

日本タイ文化会館の目的を達成するため、日本語の授業、充実した様々な教材、講演会、日本に行く人への支援や協力などを提供する他、人材斡旋活動も行っている。男女を問わず日本語や日本文化に興味を持っているタイ人を歓迎している。

#### 日本語教室 (訳注3)

日本語授業を行うため、日本タイ文化会館内でバンコク日本語学校を設立した。

(p4)

2

#### 授業を行うにあたって

学生が短期間で学習できるように、集中的に授業を行う。言語だけでなく、日本人の文化・習慣および生活なども教える。

#### クラス分け

2クラスに分かれる。

一般クラスには3学年あり、規則どおり初級日本語の学習から始める。

特別クラスは日本に留学する人もしくは集中講義を希望する人を対象とするクラス。学習期間は1年。

#### 授業料および教材費

授業料および教材費は合わせて支払わなければならない。

### 特典

優秀な学生は学校から日本への留学、または日本見学の奨学金といった支援を受けることができる。また、賞金もある。

(p5)

3

### 文化教室（訳注 4）

日タイ文化交流を図り、それに関心を持つ人を歓迎する。また、両国の友好関係を推進するため、文化紹介の講演や日タイ関連書籍の提供を行う。

### 講演会

この学校は在校生、卒業生、元留学生に対して日本人・タイ人の学者による講演を行う。基本的には月 1 回行うが、機会や状況により 1 回以上行うこともある。そのほか、生け花、習字、日本習慣、柔道、フェンシング（訳注 5）、アーチェリー（訳注 6）などといった活動も実施する。

### 交流会

言語・文化、スポーツや舞踊に関する交流のため、お茶会および懇談会を実施する。

### 図書館

和書洋書ともに日本に関する様々な書籍を用意し、鑑賞する機会を提供する。また、日タイ友好関係推進をテーマとする書籍および新聞も発行する。

(p6)

## バンコク日本語学校規則

### バンコク日本語学校

日本タイ文化会館は、日本タイ協会の支援のもと、日本語および日本文化を教えるためバンコク日本語学校を設立した。

### 所在地

バンコク市内のタムボン・タープラ（ターチャーンワンルアン）、ナープララーン通り、21 番地のビルにある（訳注 7）。連絡は電話番号の 21544 でも可能なので、とても便利である。

#### 授業

バンコク日本語学校はすぐ応用できるように、実用的な「直接法」（訳注 8）により授業を行う。

#### 特典

在校生は成績優秀で健康な者なら、選抜試験後、日本への留学、または、日本見学という特権の他、賞金、または就職斡旋などの支援を受けられる。

(p7)

5

#### 募集

教育省（訳注 9）が定めた小学校義務教育を終了した 12 歳以上の者なら、男女問わず募集する。応募者が定員以上になった場合、選抜入学試験を行う。

#### 募集期間

4 月 1 日から 5 月 2 日まで（訳注 10）を募集期間とする。期間を過ぎても、十分な教室があり、また授業についていけるほどの基礎知識がある学生なら、入学可能である。

#### 入学試験

4 月 1 日から 5 月 2 日までの募集期間を過ぎて、応募する人は入学試験を受けなければならない。

#### 入学申請

学校指定申請書を各自提出すること。無事入学が決まったら、先に 1 学期分の授業料および教材費を納める。その際、学校側から学生証明書と領収書を渡される。学生は必ずこの学生証明書の番号を覚えなければならない。

(p8)

6

（申請済みではあるが、教室不足やその他の原因によりまだ受講できない人は毎年 4 月 1 日から

5月2日までの間に実施される新期生入学決定の結果を問い合わせ、自分が受講できるかどうか確認してください。)

クラス分け 2つに分かれる

一般クラス 1、2、3年 規則どおりに初級日本語の学習から始まる。

特別クラス 1年 日本に留学する人もしくは集中講義を希望する人を対象とするクラス。学習期間は1年。

カリキュラムおよび時間割 (1週間)

<u>クラス</u>	一般 1年	一般 2年	一般 3年	特別	
<u>科目</u>					
会話	5	5	3	10	時間
読解 (訳注 11)	3	4	5	7	//
書き (訳注 12)	2	—	—	1	//
作文	—	1	1	1	//
文法	—	—	1	1	//
時間の合計	10	10	10	20	//

(p9)

日本語教科書

<u>クラス</u> <u>科目</u>	一般1年	一般2年	一般3年	特別
会話	会話テキスト 1, 2	テキスト 3	テキスト 3	テキスト 1, 2
読解	日本語読解 テキスト 1-8			日本語読解 テキスト 1, 2
書き方	小学校日本語 テキスト 3, 4	テキスト 5, 6, 7	テキスト 8, 9, 10	テキスト 3-10

### 授業料および教材費

授業料および教材費は合わせて支払わなければいけない。学期休み期間中、学期ごとに前もって支払わなければならない。前期だけは4月1日—5月2日の間に支払うこと。

前期 (4月1日—5月2日の間に支払うこと) 一般4パーツ 特別12パーツ

中期 (8月18日—31日の間に支払うこと) 一般4パーツ 特別12パーツ

(p10)

8

後期 (12月5日—19日の間に支払うこと) 一般4パーツ 特別12パーツ

支払済みの授業料は返金不可である。

学期の途中や学期末など、途中入学の者は入学した月から月ベースで計算し授業料を減額する。

妥当な理由がなく、上記の支払期間内に授業料の支払を怠った場合、学校名簿から除名されることになる。

### 学生個人簿の証明写真

正規の学生となったら、学生個人簿に添付するため、学校に1.5×2インチの(半身の)証明写真を提出すること。

学期および休み 年間3期に分かれている

前期 5月17日から8月17日まで授業を行う

8月18日から31日までの14日間は休みとする

中期 9月1日から12月4日まで授業を行う

12月5日から19日までの15日間は休みとする

(p11)

9

後期 12月20日から3月26日まで授業を行う

3月27日から5月16日までの50日間は休みとする

### 通常休日

土日および祝祭日（政府規定や公立学校の規定にもとづく）は休みとする。そして、以下の日も休みとする。

日本天皇陛下の誕生日	(4月29日)
日本海軍記念日	(5月27日)
明治天皇誕生日	(11月3日)
日本の正月	(1月1日)
初代日本天皇即位記念日	(2月11日)
日本陸軍記念日	(3月10日)

### 欠席

授業に出席できない事情がある場合は欠席理由を書いて申請書を提出しなければならない。申請せずに1か月以上欠席すれば、学校名簿から除名されることになる。

授業時間 17:00—20:40を授業時間とする。

クラス	学年	グループ	授業時間
一般		午後	17:00—18:25
		夜間	18:30—19:55
特別			17:00—19:55

(p12)

10

### 定期試験

学期ごとに定期試験日や特別試験実施を発表するが、成績は出席率も考慮し、10点満点のうち4点以下なら不出来（訳注13）とされる。

### 合格証明書または資格証明書

定期試験に合格した学生は学校から合格の証として証明書を渡される。



## 校則

1. 学校内にいる時は校則を守り、慎んだ行動をとること。また、清潔にすること。
2. 学校内にいる時はなるべく日本の習慣に従う行動や振る舞いをするように努力すること。
3. 授業時間内は必ず日本語を使用すること。

上記のような校則を守らなかったり、先生方の注意やアドバイスに反した行動をとったりする場合、または、学校の名誉を毀損するような行動行為を行った場合は退学処分も考えられる。

(裏表紙)

(紋章)

印刷者：プラチャン印刷会社（所在地：タープラチャン、プラナコーン）

広告・印刷者：Mr. サナン・ブンナヤシリパン（訳注 14）

2483 年

## 訳注

- (1) 表紙の裏は白紙でその次のページから室内の写真が掲載されている。本訳ではその写真のページを第 1 ページとし、「p1」としている。ただし本案内パンフレットの「p4」から各ページの第 1 行目中心に書かれている数字は、パンフレットに付けられたページ数でありこの数字も訳として記載したが、数字は「p」の数字とは 2 ずつずれている。
- (2) 仏暦 2483 年は西暦 1940（昭和 15）年
- (3) 原文は（以下、タイ文字を音韻表記で記す）「phanèek phaasāa yīipùn」
- (4) 原文は「phanèek wátthanatham」
- (5) タイ語では英語でフェンシングとなっているがこれは「剣道」だと考えられる。
- (6) タイ語では英語でアーチェリーとなっているがこれは「弓道」だと考えられる。
- (7) この場所は現在銀行となっているが建物は現存する。
- (8) 原文は「wíthii（方法） troṅ（直接、まっすぐ）」。
- (9) 当時の名称は krasuaṅ thammakaanであるが、現代は krasuaṅ suksāathíkaanである。
- (10) 原文では期間の表記に「tāṅtēe～ thūṅṅ～」と「—」を混用しており、訳文でも原文に従い、「～から～まで」と「—」を使用する。
- (11) 原文は「?aan」
- (12) 原文は「khīan」であり、2 年以降に「作文」の科目があるためこの「書き」の内容はひら

がなカタカナなどの文字の書き方学習であろうと推測される。

(13) 原文は「cháy mây dây」と「使い物にならない」「出来が悪い」という意味の言葉を使っており、「不合格」という単語は使われていないが、実質的には「不合格」となるのではないかと考えられる。

(14) 原文は、「naay sanàn bunnayasiriphan」

「日本タイ文化会館およびバンコク日本語学校規則」のコピーを使用し、日本語訳を行い公開することを快く許可して下さった星田言氏にあつくお礼申し上げます。

#### 注

(1) 星田晋五に関しては北村・ウォラウト (2001) を参照。

#### 参考文献

北村武士、ウォラウト・チラソンバット (2001) 「昭和 13 年の日本-タイ文化研究所日本語学校の設立について—星田晋吾の仕事を中心に—」『国際交流基金バンコック日本語センター紀要』第 4 号、国際交流基金バンコック日本語センター、137-145

長谷川恒雄 (2001) 「バンコク日本文化研究所 (1938) の日本語教育計画」『日本語と日本語教育』第 29 号、慶応義塾大学日本語日本文化教育センター、1-20

長谷川恒雄 (2003) 「『日暹文化事業実施並調査報告書』にみられる日本語教育施策の方向性」『日本語と日本語教育』第 31 号、慶応義塾大学日本語日本文化教育センター、65-74

松井嘉和、北村武士、ウォーラウト・チラソンバット (1999) 『タイにおける日本語教育—その基盤と生成と発展—』錦正社